



瞳

石山 文香

舗装された地面に高層ビル。日本では見ないような広い道路。バイクは一つの車線の中に3台ほど並んでいてどこまでも続いている。それを見てどこかほっとする自分がいた。

4日間ほどジャカルタで過ごしたが、やはりその印象が変わることはなく拍子抜けした。「発展途上国」といってもこんなものか、と思った。4日目の午後からバスに揺られジャカルタの東にある都市バンドンに向かった。

バンドンのチマヒに着き、朝の光に照らされた村を見て私は目を疑った。教科書で見る大正時代の集落のような家々。「発展途上国」を想像した景色と近しいものだった。村の小学校を訪問することになっており、「物を盗まれるのではないか」などと警戒した。小学生が道の脇に立ち、両国の国旗を振り笑顔で「ようこそせんばい」と歌い私たちを歓迎した。交流を重ねるうちに警戒心や不信感は消えていた。

しかしある生徒に年齢を訊いた際、9歳だと思っていた生徒が12歳だったことには驚いた。彼は私が驚いていることに對し不思議そうだった。

「貧富の差」これが私がこの研修で一番感じたことだ。どちらが豊かなのか、と訊かれても答えられない。ジャカルタとチマヒ共に「貧」の面、「豊」の面もあるからだ。この2つをうまく融合できれば発展途上国の「貧しさ」というのはなくなる。これは資金で解決する問題ではないように思う。この課題について私は日々考え続ける。彼らの無垢な瞳を、私は一生忘れない。